

京都の旅館で録音した例の「対話集」に、事業パートナーの解散、立て直し、債務返済から経営の好転にいたる敏生のサクセスストーリーと、それを聞き終わった後の父と子の短い会話が残っている。

父「失敗を乗り越えて最後の勝利をものにする。お前もなかなか大した奴だ。」

敏生「借金の返済で鍛えてもらったおかげです。」

父「皮肉か？お前」

敏生（深々と頭を下げて）「いいえ、心からそう思っています。」

読書の楽しみ

林家の蔵書の豊かさは、日本時代にあってはまれである。林家は近隣に聞こえた「書香の家」。その文化的雰囲気は、よく友人から羨ましがられた。敏生自身も「サロンのような」家を誇りに思っていた。

家の中二階には、長編、中編小説や『講談社倶楽部』、『幼年倶楽部』、『少年倶楽部』、『婦人の友』、『キング』などの雑誌が、うず高く積まれていた。文学少年というわけではなかったが、家にある本は手当たり次第に読みちらかした。その中に成人向けの本がだいたい混じっていたことは、ずいぶん小さい頃に「子供がどうして生まれるのか」を知っていた事実からも分かる。

家族の誰もが活発で外向的な子供だと思っていた敏生だが、人一倍好奇心の強い彼は、一人静かに書物の世界に浸ることも多かった。寿小学校の国語教育で養った基礎と広範な課外読書で、敏生の日本語は同年齢の子供たちをはるかに凌いでいた。「国語辞典に知らない字はほとんどない」と豪語するのにも無理はない。

しかしそこに台湾光復。学校は突如として日本語から中国語に。小学五年生だった敏生には、適応しがたい急激な変化だった。

発音もあやふやな状態で、中国語の書物に親しめといっても無理な話。読書の好きな敏生にとってはなおさら耐えがたい。知識欲を満たすには日本語に頼るしかなく、文化の断層期―光復後の四、五年は、貸本屋がよいの日々だった。数時間も立ち読みして倦まない少年のまわりを、店主はしげく巡回する。

中学生になってからは壁新聞が日課になった。自転車に乗って赤峰街の『内外新聞』社へ。門前に貼られた閲覧用の新聞は、一字一句も漏らさず眼中に収めた。新聞を読み終わったあとの満足感。世界のニュースを掌中にした知的喜び。中でもスポーツニュース、三面記事やきわどい大人のジョークに、敏生少年は興奮した。『内外新聞』は政局の空白期、情報の乏しかったあの時代に、父が買ってくれる日本の長編小説と並んで、敏生の大きな精神の糧となった。

二人の姉の証言によれば、敏生の読書好きはかなり幼い頃からのものらしいが、長じても、書物は敏生の生涯の友。自宅には、政治、経営、経済、法律、中国語日本語英語とりまぜて、とにかく雑多な書籍が並べられている。

『三国志』、『水滸伝』といった中国の古典小説も日本語で読んだ。高校受験の時だったので、父親

の叱責を恐れた敏生は、蚊帳の中で隠れて読んだ。同じ吉川英治の『宮本武蔵』や『太閤記』を読み終わる頃には立派な近視眼。生涯めがねの世話になる身の上になっていた。

大学に入って図書館の貸出カードを手にした時の喜びは大変なものだった。町の貸本屋は有料だし、立ち読みは居心地が悪い。図書館の膨大な蔵書がこれで自分の世界になる。天にも登る気持だった。

大学一年の敏生は、むさぼるように日本の小説を読んだ。書店や家の蔵書にない西洋文学の名著などが、彼の読書遍歴に新たなページを加えた。大学は知識の宝庫。敏生は渴きを癒すように、新しい知識を吸収していった。ちなみに彼の専門は法学。法学関係の書籍は法学院の別の図書館にあったのだが、それを敏生が知ったのは、うかつにも第二学期の終了まぎわだった。

学問遍歴

何にでも興味をもつ敏生は、好奇心をもてあましていたのか、真面目な学生だったとはお世辞にも言えない。試験はいつもぶっつけ本番。それでも通ってしまう神がかりなところがあって、兄弟はみな不思議がった。

日本時代に小学校四年まで順調に過ごした彼が、最初にぶち当たった壁は、政局の激変にとまなう日本語教育の終結と中国語教育の開始であった。なれ親しんだ日本人の先生やクラスメートは誰もい